

## ○4月モニターレポート

区間:矢作川右岸 35.5km～34.5km

4月のレポートです。よろしくお願ひします。

私の担当する豊田区間の最下流部には明治用水頭首工という施設があります。車でその天端道路(かなり狭いため記憶に残りやすい)を通ることは度々ありました。しかし頭首工？我々一般人にはあまりなじみのない言葉であります。きっと重要な役割を果たしているのでしょうか……。その意味は、湖沼、河川などから用水路へ必要な用水を引き入れるための施設。取水、分水、放流または塩害の防止等を目的として、流水をせき上げ、調節するために河川を横断して造られる施設。つまり一般的には「堰」のことで、各関連の専門分野において専門用語として頭首工と呼んでいるとのこと。

今回は、この明治用水頭首工について簡単ではありますが報告します。

### 【明治用水頭首工の沿革】

明治用水は都築弥厚翁によって計画(1808年)され、明治13年4月(1880年)に通水した。これによって現在の安城市を中心に約8000haの農地が拓かれ、往時「日本のデンマーク」と呼ばれる農業先進地となり、今日でも地域発展の大動脈となっている。明治用水の取水位置は最初、この地点から約2km上流の草堰から取水した。次に明治34年(1901年)上流300mに石造り堰堤(左岸側にその一部の遺跡が見える)を築造したがこれも老朽化したため昭和25年に、この地に農林水産省によって国営かんがい排水事業の一環として築造された。昭和33年に工事費6億400万円で現頭首工が完成しました。その後矢作川の河床が著しく低下して頭首工が損傷したので、昭和53年から国営造成土地改良施設整備事業で補修工事を実施しました。

実際に目にして、そして学んでみて、歴史ある施設という感想を持ちました。また、近くには明治用水旧頭首工の一部もまだ現存しており、その歴史に触れることができます。



明治用水旧頭首工絵図、画題は「水源春暖」



明治時代の石造り堰堤



農業用水史上初期の横断堰堤で、服部長七考案の人造石による大規模な堰堤の現存する唯一の例と云われている。



明治用水旧頭首工と船通し閘門